

差別と貧困からの脱却に向けて

～「ササカワ・インド・ハンセン病財団」の事業評価で得られた示唆～

1970年代からハンセン病対策支援に取り組んできた日本財団は2006年、世界最多のハンセン病患者を抱えるインドで「ササカワ・インド・ハンセン病財団」(Sasakawa India Leprosy Foundation: SILF)を設立した。ハンセン病は、発病率が極めて低く、感染力も弱い感染症ではあるが、顔や手の変形や眼疾など外見に重い後遺症をもたらす性質がある。そのため、病気に対する誤った認識や偏見を生みやすく、ハンセン病患者やその回復者は社会から隔離された生活を強いられるなど、長年、差別の対象になってきた。インドにおいてもこうした差別は根強く、回復者の多くは職に就けず、物乞いで生計を立てざるを得なくなっている。その上、彼らの子どもたちも、社会的な差別や家庭の貧しさが原因で教育にアクセスする機会を制限されるなど、貧困のサイクルに巻き込まれている。SILFは、この悪循環を断ち切るべく、ハンセン病の回復者やその家族が物乞いをしなくても生活できるように、彼らの経済的な自立を支援している。職業訓練などを通じて彼らの就業機会を増やす活動を行っているほか、インド国内でハンセン病の認知度を高める啓発活動も展開している。

ハンセン病回復者の多くは自らリスクをとって事業を始めることに慣れていないため、SILFは地元の関係者と協力し、回復者に寄り添って、彼らが立ち上げる事業に対してきめ細かな支援を行ってきた。この支援により、それまで他者から借りていた人力車を購入して手取り収入を増やすことに成功したり、山羊や水牛などを飼育してミルクを生産・販売し所得を増加させたりして、物乞いや日雇い労働などによる不安定な生活から脱却した者もでてくる。受益者の中には「増えた所得により子どもをよい学校に通わせることができた」、「以前は交流のなかったコロニー(ハンセン病回復者が生活している場所)外の人々がコロニーの中まで来て、一緒にお茶を飲むようになった」、「コロニー外に住む人々の家に招待されたり、一緒に旅行にも行った」などの声が聞かれ、彼

らの生活が改善したことや自尊心が回復したこと、外部社会との接点が増えて自信がついた様子が伺えた。また、毎月一定額を貯蓄できるようになり怪我や病気に備えられるようになったことも、彼らが心の平穏を得て、自信や自尊心が芽生える結果につながっている。

こうした活動にあたり、SILFはコロニーに対して事業資金の貸し付け原資を贈与している。コロニーはその資金を回復者やその家族

に貸し、借り手はコロニー共有銀行口座に返済する。そこから次の人が資金を借りるというリボルビング資金としての活用が目指されている。そこでは「返済の為に物乞いに戻ることは本末転倒」とのSILFの考えの下、借り手は3年程度を目安に返せる時に返す、返済遅延に対する罰則もないという通常の金融と比べ緩い条件で貸し付けが行われている。そのため、余剰資金ができて他の用途が優先され、積極的にコロニー共有銀行の口座に返済するインセンティブが働きにくい状況も見られた。

しかし、数は限られるものの、貸付資金が3年程度でコロニー共有銀行口座に返済され、次の借り手に貸し出されたコロニーも見られた。そのようなコロニーではリーダーを中心に内部でよく話し合いが行われ、SILFの贈与資金はコロニー全体のためのものであることを住民が

納得して資金を使用していた。通常の金融では考えにくい「返せるときに返す」という、ゆるい返済条件にもかかわらず、きちんと返済し、コロニー住人が自らリボルビング資金を運用している背景には、人々に信頼されたリーダーの存在、コロニー内の強い社会的結束、SILF職員や地元関係者の地道な支援などがあったと考えられる。人々に尊厳のある生活の確保と、物乞いからの脱却の重要性を説いていたリーダーの一人が発した「他者を助けることは自分を助けることになる」という言葉は重みのあるものであった。

※この記事は2014年度日本財団委託「ササカワ・インド・ハンセン病財団」評価調査を踏まえて書いたものである。

(文責：国際開発センター 主任研究員 鳥海 直子)



SILFの贈与資金をリボルビング資金として活用しているコロニーのリーダー